

松屋筆記

卷十八

45
1397
2



15
1397
2

51

昭和二十一年八月一日
高田早苗

松屋菖記

卷十八



乃ソヤニキ

杉屋号記巻六目録

一 奉公相承

二 鏡鏡相承

三 子やらみ

四 ひづら

五 三三いろ

六 かしこ

七 しのくさ

八 房那方

九 鏡鏡の名

十 中 本
 十一 中 本
 十二 中 本
 十三 中 本
 十四 中 本
 十五 中 本
 十六 中 本
 十七 中 本
 十八 中 本
 十九 中 本
 二十 中 本

一 侍者
 二 打輪 玉 蠅 拵
 三 勅書 あり 再 口 道 あり
 四 文 治 建 久 の 政 有
 五 後 侍
 六 高 寺 并 節 經
 七 禮 誠 并 慈 地 漢 語 誠 有
 八 礼 盤 色 物 礼
 九 京 都 の 出 出
 十 中 本

(廿七) 下よきいふ不調乳
 (廿八) 城野よきいふ
 (廿九) 海の子の河は片應製の河は
 (三十) 中左の家
 (三十一) 東大寺大炊屋
 (三十二) 養中吊布中
 (三十三) 麓を幸天井
 (三十四) 信松侍
 (三十五) 吉備の冬防信の唐紙切玉
 おこし

(廿六) 神の使
 (廿七) 関の字関とある
 (廿八) 日よきいふんよきいふ
 (廿九) 麻良
 (三十) 千世の帯織が乳
 (三十一) 短冊の家よきいふ
 (三十二) 林お玉よきいふ
 (三十三) りお玉よきいふ
 (三十四) 福
 (三十五) 吉備の冬防信の唐紙切玉

④ 今将
⑤ りこの丸節
⑥ 寺をふるまの明井
⑦ 山さし
⑧ ころころ。美女を前に明井。
はるるのり。あまのまのころころ。猫
ころの井。あまのまの明井。
⑨ 寺を陸を田り。はるるのり。
ふ。又。このころころ。あまのまの明井。
ふ。あまのまの明井。あまのまの明井。

⑩ 串陸の海極川
⑪ 串陸の海極川
⑫ 串陸の海極川
⑬ ヤしくと。龍は海

松屋筆記十八

東都 源興清文儒務

① 秦筆相承

秦筆 堪敏の人の相傳血脈の唐
の孫 廣より 源信の左大臣の傳り
より 代々 相傳とす 秦筆相承血
脈より也

② 琵琶相承

琵琶 堪敏の相傳い唐の唐承より
遣唐使 藤原貞敏より 貞敏より

清和茅田皇子貞保親王の傳一云
代々相傳せしと琵琶血脈子見え
らる

⑤ 子やらんく

順徳院中琵琶合子其言もやら
んく又もりやんくはどるも琵琶
の音の名を今世よりくといふり、
しきなりあまゆめ 記しゆめ

④ ひぶら

同書子書力て彈えとらるる聊しは

らるる所 今ビシくスル又ビリ
ツクたをいふゆめ

③ ともいふ

同書よりともいふしよらうつくしき又
らるらうらうらなるもいふことあり
解り色のゆめ

② のゆめ

同の書琵琶の存より唐也とあり唐也
存の故もあらしき唐のゆめあり
らるる

琵琶の
調と
秘傳

⑦ しのくー

のまよあさしろうまよふくくーしのくー
下しあしとまよしのくーまよふくくー

⑧ 音班カ

のまよ音班カいちいせれまよあさハ
音抄るんし行るや

⑨ 琵琶の名所

音抄子や^{カヒ}抄^{カヒ}の遠しあさし。名所
甲。腹。やま。搭。面。頸。隠。丹。目の上中下。
なごい名目あし。しうすし琵琶の名所

⑩ ぬまの木

日まよ琵琶の音得よまあひのあひこは

あしうか^イあしう^イ信島まよるやのあひ
盤あし^イぬまの木の名し和名抄子^イ作^イ
和名由是隠諾
録は音

⑪ 木のまよし目并たせ已

のまよ琵琶の甲い葉つみ腹のまよ
なぬ木のまよし腹のまよし目并たせ已
い目のまよし目并たせ已い目并たせ已
のまよし目并たせ已い目并たせ已
のまよし目并たせ已い目并たせ已

ソリと云ふ

(三) 中 間

口々の捺面の中はみおのりとおのり
 びみおの上へぐらぐらとすすりの中は
 みおのりおのり

(五) ゆく

口々の中腹はみおのりとおのり
 ぐらぐらとすすりの中はみおのりとおのり
 その修理の度におのりのすすりとおのり
口々の中腹はみおのりとおのり
 ぐらぐらとすすりの中はみおのりとおのり
 その修理の度におのりのすすりとおのり
 の中腹はみおのりとおのり
 ぐらぐらとすすりの中はみおのりとおのり
 その修理の度におのりのすすりとおのり

も標づくしと云ふは、おのりおのり

あやや家化のりなどの時、五人づか
 しおのりを用ゑあややとスルルは、おのり
 手(四) 標づくしと云ふは、おのりおのり

ワケしおのり、つと云ふ

(六) とりくと鳴る

口々の中腹はみおのりとおのり
 あややとすすりの中はみおのりとおのり
 とすすりの中はみおのりとおのり

(七) いやウ子かサイと云ふ

日多し多し正念を... けりぬ
ありての正念正念なるもの正念より
しるすの行こ

(其) かくある首ねおのむらう

日多し多し正念を... けりぬ
ありての正念正念なるもの正念より
しるすの行こ

(老) 撥副。中間男。力者

中三津流下世ウ

盛衰記廿四
七下才居
二人多ク
物アリテ
女アリテ
日四白
子即
心七
中三津流下世ウ

新撰大徳以難... 中三津流下世ウ

今原春記

相國寺供養記 撥副 山中

中同 事院

河守 長 君 才 張 羽 甲 役 皆 中 同

下等 兵士 五

男云々 召具 力者二人 中同

(六) 番頭。車副。牛飼。近江仕了。

所居也
三内 訣 理 死

笠持。衛府長。衛府侍。若輩。

同書子先番頭。父人。御車副。

本記 廿一 廿七

人 福梅 御牛飼 一人 福如木 御車副

才 若輩 中同と云

御牛飼二人 衛府長 御車副

毛野武者 次 衛府侍 十人

中同と云 若輩 中同と云 若輩 中同と云

若輩 中同と云 若輩 中同と云

丸侍者

同書子入堂侍者上人燈香侍者書
状侍者請客侍者湯茶侍者衣
針侍者わしありしれ道節の所従

廿打輪音繩押

同書子打輪音繩押とありし打輪

ハ因扇

廿一勅書安あ并口宣あお

同書子勅書安あとあり安あ下あ
の義勅命の趣字をさし書安あ

ふ載口宣あありしめ天子の口宣を
承て安あ書しるよのあしりぞい
りまああ

廿二文治建久の政

相國寺塔供養記に鎌倉の右大
将伊豆の世子をさつて中興の政
を中行りし文治建久の政と
てあしりし中興の政と
あしりし中興の政と
あしりし中興の政と
あしりし中興の政と

合禮識
ていこうしき
ちんとうしき

名子よりしきふとあり然れ
誠取 深平 盛氣 節々々々し
のまじ

②② 礼 般 也 並 惣 禮

日々より 礼 般 子 づつて 主 禮 一 び 威
儀 惣 禮 也 といふ 自 己 系 傍 づつて
きつ づつと あり あり 惣 禮 といふ 傍 也
禮 拜 の 式 の 如 く といふ こと あり

②② 礼 集 ぐ 目 目 の 出 出

日 々 々 々 一 下 七 山 の 大 講 堂 後

卷 一 一 素 ぐ の 内 々 々 儀 徒 々 々
と あり 素 都 儀 山 づ 々 々 儀
一 一 一 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀
ゆ 也 也 也 也 也 也 也 也 也

②② 礼 集 ぐ 目 目 の 出 出

情 脚 々 々 部 類 記 々 通 具 卿 寄
ち の 礼 と 云 々 ち ぐ 一 一 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀
々 々 々 々 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀
の 名 々 々 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀
子 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀 儀

① ところをいふ洞の乳

の書家衛々歌子

いぢのゆのちみみごのやこ月を

みぢのほしをづら子けれらまとは

とめは

② 切音子よむ

日多ふ切音讀之よむ切音讀之よむ

なり

③ 誦のふみの訓法并應制の訓法

のりま切音讀之云者白太上皇ノ

仙洞之侍テ同ノ松色碧若久トソる子

をよめるニ應制スルヤヤトコト并序

字微言内ノ切のいさしちきみ内ノ字

言讀之切音讀之序也讀師隨讀

次第被按之得師讀之間以不伏

仰是或ちあるもると云是語物記也

或えいほると云匡房記也今度予

所用書後記也とらる

④ 中殿の事

後秀光園良是の事井の記子

中取の宮と申すは、後冷泉院
天喜四年閏三月に盡三の櫻を
を感下りて元大納言即房に
大子勅して新成櫻をとり
我を力活潑取中取に群玉を
しきん即知をもく之も縁竹の宮
此ありしは、白河院應徳
元年三月左大納言房に勅して
花契多事と申すは、けんぎ
乙中取を得て申すは、又堀川

院永長元年三月權中納言
房に勅して花契多年といふ
子献を、之を康安色の下り
崇徳院應永元年十月權中
納言師頼卿に勅して松樹久
孫と申すは、けんぎ
宮ありしは、順徳院建保六年
月右大臣藤原朝光、光明子勅
して池月久明と申すは、けんぎ
乙中取を、後醍醐元徳

二年二月播中幼氣為定なり
勅しん花契為君と子別しと
し中殿え海をさし此か
承保二年四月長治二年三月
嘉承二年三月建武二年
四月清原取え和歌富ありと
とと初度とと中殿の
富の先規子ららるるや
代りともはるる人序子考るこ
柳貞治六年の君九城の内花か

くはくハ嶋のぬ丸をい海さの時
みさえと意安をい得るしとありと
并序のと建保の征陽とたつて
る白くともけいしたる征夷大将
軍此をまのぬ丸と海をい
勅撰たども中行りしと建
武意安の子殿左府の芳陽の
ありしと再三勅命ありし候
多ありしとまのぬ丸のたつた
代の美漢なるともやと云中

殿の多あの中古以来とらつての七
度とほほの此のいふをなす(海)行も
ゆいといとまゝおの殿(海)部類記
神皇正統記村上の條古今著聞集
四の巻 珍事どもをえさうい可考なり

世 東大寺大炊屋

圓融院御受戒記に東大寺においし
御一覽大炊屋米十五石一畝炊
之數十人用轆轤ハス籠フス賣フス杖フス者
廿人許ハス餼ハス飯ハス納ハス槽ハス樋ハス引ハス水ハス洗ハス

飯也といふ

世 食中 米布中

同書に信濃布三十端為食中
とあり 東寺蔵寛政二年の文書に
新加村味曾重袋布中ハスツス。ヤリ
たといふ今も膳枕の類を拭ふ中も
ツキといふ是也

世 慶長元年 天井

同書に廿三日還御云々午時到ハス贊
池邊備正新合池北架以別居堤

天井
軒鏡一停
天井台記
三十一

正字年
僧補奉
上三
天并
火災
并名也

草者分善之諸烟者分幕之南
則池水泓澄河鶴江鷗沙自馴
矣北則山巖峩峩方松風簾月
畫道有之見中柴垣教尺草堂
三間用簷草為天井施竹簾
為屏風凡厥費用莫不質素
毋屋後所產南底為僧調公卿
唐東底為信侍西底及廊為僧
唐頃之侯即齋次衝重檜破子
屯食者分佐所之矣在之道信以

飽以醉

廿六續松信

同書子殿為門大路與木過大路王
殿所候御續松信二十餘年炸
次云

世吉備公方昉信正唐繼朝五

号之事

松浦前宮倚起之関子吉備大
王多助信正の階悪唐嗣朝五の
忠直由子云云此縁起古也

ナリ

神の使鳥

同書子鳥者佐老鶴者香雅鳩者
ハ陽大是鳥也と云也 皇年三百三才

光朝の字関と云

備戒頭が現果随録卷之一陣を
修以力漢関前大士賜目修子隱
法子内隱ハ天ノとあり 関の字を
ナリ関と云 俗字ナリ云

四子 日子是日んま云

俗云云云と云ふこと云んこと云
おとると云ふこと云ふこと云
と云ふこと云ふこと云ふこと云
おとると云ふこと云ふこと云
おとると云ふこと云ふこと云
おとると云ふこと云ふこと云
おとると云ふこと云ふこと云
おとると云ふこと云ふこと云

四 麻良

神名帳下子丹後國加佐郡麻良多

神社云々 記上 鍛人天津麻

又神名帳云々
又神名帳云々
又神名帳云々

此地名九四

古名曰云々
皇極記曰
伊勢古神宮
之使鳥

皇極記曰 三界朝天子因之格
浮南寧三帝有三界朝最靈靈
云龍之神如許平南人

類聚名新

木部

根

字鏡身

胎

原

帝

古事記

垂相

行象

子腹

子腹

子腹

子腹

子腹

子腹

子腹

子腹

子腹

羅 麻羅二字 緝結紀子佐鍛部

天津真浦 貞浦 貞浦 貞浦 貞浦

天津麻良 貞氏 録子太足造神

魂命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

命ハ世孫天津麻良命之後也

子腹

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

和名

火之

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

火之 起

此巻記七
 神と陰相
 前カレ
 此巻記七
 神と陰相
 前カレ

知ボク火火を火あつたりみ
 ともや五門に盤をツッホヤ火
 ともる又たうー陰裏火
 の略通を火あつたりや今
 の世金勢大の神とらえ路き子石の麻
 良とすつる天津麻羅の神とら
 (四) 千葉常平の歌
 武蔵国浪里の宮と伊去の社あり
 まるよ千葉常平の歌あり
 □□□□の糸片束の□

武蔵国浪里の宮と伊去の社あり
 の伊去社の神ありけり
 してやみこすはる

千葉常平の歌
 武蔵国浪里の宮と伊去の社あり
 の伊去社の神ありけり
 してやみこすはる

(四三) 短冊の字

短冊の字といふ物諸子子ありとされ
の字わしの類えを寛永ころありや
くさきころよしころも一巻たりしんを
ふて五冊と以後や陸國新治郡
みろふねの城を村た島氏村といふ
人の娘おと好とよみの地國を新の
庄次家定と相別し由縁とつたりお
つりころ子ころ

④ 林お茶つみのお

短冊の字一の巻子中比事陸國

村のた島氏村といふ人あり新治の郡
ゆきみの時といふ事よは被さつたり
只もきりたの事といふ事くらんお
しおた一いお在年二いお在年といふ
おらうおの姓をえおりもはは
をなはれ姓をえおりもはは
えんとえと与流地子常信村中
二里はりう西子お村あり新治郡
のゆきまの親書るの席哉は流の
の門人といふお村の村た島つみ氏の

あつた

うきつてアノよういぢぢぢの梅のうき
カにカシケイカシカシカシカシカ
カシカシカシカシカシカシカシカ

とととととととととととととととととと

④いりこの丸印

又またまたまたまたまたまたまたまた
けみ先の中はやくとととととととと

⑤とととととととととと

みまの丸印とととととととととととと

やまのまつういぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
そのいよふふふふふふふふふふふふ
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
とととととととととととととととととと
いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

⑤いぢぢぢぢぢ

あらんやふふあめりのつとまお
やうのくさかぬあつて親神是より
まをみふけりかきと一年一度
の二年は一夜のあつたけい
まをみふけりかきと一年一度
の二年は一夜のあつたけい
あらんやふふあめりのつとまお
やうのくさかぬあつて親神是より
まをみふけりかきと一年一度
の二年は一夜のあつたけい

まのりさうのつとまお
あらんやふふあめりのつとまお
やうのくさかぬあつて親神是より
まをみふけりかきと一年一度
の二年は一夜のあつたけい
あらんやふふあめりのつとまお
やうのくさかぬあつて親神是より
まをみふけりかきと一年一度
の二年は一夜のあつたけい

きつちるべしヤとエは高(高)言(言)

白紙の書札





